

2010年7月～

人間歯科学研究会報

人間歯科学研究会

〒567-0883 茨木市大手町 7-26

FAX 072-626-6519

E-mail yoshihara@gold.ocn.ne.jp

“O157” 日本列島を駆けめぐる！

学校歯科検診による小児の歯科治療がほぼ収束に近い。一方で O157（腸管出血性大腸菌）の感染者が増加し始めた。

6～9月前半までは食中毒増加時期だといわれているが、乳幼児や高齢者は感染しやすいので要注意である。歯科医院での感染には十分に注意しなければならない。

治療前の口腔清掃に歯ブラシを使う歯科医院では、個人歯ブラシを水流で十分に水洗いするように心がけ、手指消毒は外科消毒を基本とする。特にタオルは細菌の温床だといわれている。ウイルスではないので空中浮遊はないが、器具・薬ビンなどはティッシュペーパーでも耐菌効果があるとされている。

「噛む」が歯科医師会のキャッチフレーズ

歯科医の治療内容は、基本的に“むし歯”と“歯周病”であるが、患者の自発的な予防（Home Care, Self Treatment）が大切なことはいままでもない。

歯科医師、歯科衛生士、歯科助手、保健婦、看護師、介護士などが一体となって、日常生活習慣についての指導は欠かせない。ただし生活習慣が乱れたり、自発的予防の認識が薄いために生じた疾患については、完全な治療技術を歯科医師が持っていることが前提である。

うわべだけのキャッチフレーズではむなしい・・・。

「噛む」ための指導についても、一部のあるいは一時期の状況だけではなくあらゆる条件に対して分析され、マニフェストともいわれるプログラムができていくことが望ましい。

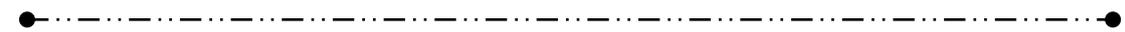
私たちは長年にわたってそれらの研究を重ねた結果、イギリスの福祉制度に盛り込まれた「揺りかごから墓場まで」（赤ちゃんから高齢者まで）のプログラムができあがっている。これには、育児を実践中のお母様たちから車椅子にたよっている総義歯の高齢者まで多くの方たちのご協力を頂いた。

「噛む」ための指導は、専門家たちによって「咬合指導」と名付けられて、口腔清掃から噛み方、噛み合わせそして咬合調整までが含まれている。食事の仕方や食事の内容についてはいまでもない。

各年齢や各種の症例に対して、必要に応じて噛むためのトレーナーを使用すると、噛む能力が特殊な装置を用いずに向上するという結果を約600例について証明した。“Chewing Master CAM CAM”がそれである。

CAM CAM Academy について

CAM CAM Academy は、歯科医師やスタッフに対してのレクチャーとワークショップが一緒になった研修システムである。2日間にわたって咀嚼咬合理論を実践によって学ぶことができる。



注目すべき食事法とその内容は、アンケートや問診から聞き出して咀嚼回数と咬合力を求める。特定の検査法は、著書「噛めば噛むほど子どもは伸びる！」を参考にしていきたい。

咬み合わせ形に特異な習慣性を認めたり、咬合型が不自然である場合には、授乳・離乳・4回食・普通食までの内容や状況について、さかのぼってメモを書き出してもらおう。

見落としとしてはならないことは、口の中や口の周りに食べたものが残っているかどうかである。よく噛み、しっかり飲み込むという一連の動作の履歴や記録を残しておくとうい。口呼吸や鼻づまり、目やになどは「食」以前の問題であるといえよう。

口腔内への母親の手指による刺激と愛情の適度は、ブラッシングの仕方とPCR（プラークコントロールレコード）によって判断される。

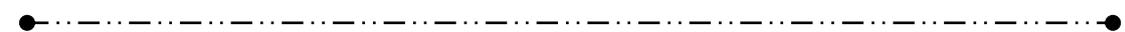
PCR 値が高いほど母親の口腔への関心が低いことが証明されている。これは成人では小児期の問題が尾を引いているということであろう。

食事だけでなく PCR が咬合・咀嚼の発達を左右するということは、知能や寿命を左右することにつながる。

呼吸・吐き出し・飲み込み・唾液量とその成分・発音・知能、そして口腔内の免疫力、歯列・咬合など歯科医療に関連していることは、噛むから始まるといっても過言ではない。

さらには、人間の証明である二足歩行のための筋肉と骨格が健康に発達しているかどうか、噛むことにあることを肝に銘じておいて欲しい。

CAM CAMは、手を使う動作をしながら1日20分連続して噛むことによって、脳波が変わり集中力が増して身体全体を健康に導く。過剰な咬合やストレス性咬合は、口腔内に入れて安静位ですぐすのがよい。



熱意のこもった咬合指導によって、口輪筋・咀嚼筋・顔面表情筋が発達する。健康的な知的美人顔になるとは、実に楽しい歯科医療である。

指導者の向上が歯科医界の向上につながる！